

甲賀市くすり学習館

甲賀地域は、薬草の栽培に長い歴史を持っています。これらの薬草に関する知識は忍者にとって重要であり、彼らはこれらを組み合わせて様々な薬を作り出しました。甲賀市くすり学習館を訪れ、忍者が薬草をどのように使用したか、そして甲賀市と医薬の歴史について学びましょう。

常設展示には、薬学に関する道具や江戸時代（1603-1868）の薬の広告が展示され、薬の販売の歴史をたどることができます。また、薬草に関するインタラクティブな展示もあり、現在までの甲賀の製薬業界の発展を包括的に紹介しています。

忍者は薬草を利用して「忍薬」を作り、薬学の知識を活かしました。1676年、忍者家系の一員である藤林保武は、伊賀（現在の三重県）と甲賀の忍者の知識を集めた『万川集海』を編纂しました。この書物には、様々な忍薬の例が記されています。その中には、忍者が任務に赴く際や、僻地で修行を行う際に、よく使われた薬も含まれていました。また、任務を遂行するために作られた忍薬もありました。これらの薬は、敵を病気にしたり弱らせたり、あるいは忍者の存在を気付かれないように犬を倒させたりするために使用されました。

甲賀くすり学習館では、少ない料金で、忍者がエネルギーを補給するために食べていたような簡単な薬草を使った忍者食を作る体験ができます。このワークショップは全ての年齢層に適しており、事前予約が必要ですので、詳細については甲賀流リアル忍者館の観光案内所にお問い合わせください。

また、学習館の興味深い展示の一つとして、忍者と山伏（修験道の山岳修行者）との密接な関係についての詳細な情報が紹介されています。忍者と山伏は、甲賀の山々で修行を行い、環境について非常に詳しい知識を持っていました。

江戸時代初期、この地域の山伏は薬を作り、それを寺院に提供しました。後に、彼らの一部は行商人となり、家庭に薬を配布しました。その際のビジネスモデルは、まず薬を使い、その後支払いを行う方式でした。さらに、未使用の薬は後に山伏が回収し、使用された分だけの料金を請求しました。

忍者の主要な技能の一つは、敵の弱点についての情報を収集することでした。そのため、行商人に扮することは彼らにとって理想的な隠れ蓑でした。山伏に変装し、薬を持ち歩くことで、忍者は家庭に入り込み、敵の生活習慣、健康状態などについての情報を収集し、それを自分たちの利点として利用しました。